

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月2日現在

機関番号：12603

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2011

課題番号：22652047

研究課題名（和文） 留学生の文章産出時における辞書使用の実態調査
—言いたい日本語はどう見つけるか—研究課題名（英文） Investigating Dictionary Use by Foreign Students:
How are Appropriate Expressions for Writing Found?

研究代表者

鈴木 智美 (SUZUKI TOMOMI)

東京外国語大学・留学生日本語教育センター・准教授

研究者番号：70332632

研究成果の概要（和文）：世界各国・地域から日本の大学に留学し、日本語を学習している学習者（東京外国語大学留学生日本語教育センター「全学日本語プログラム」(JLPTUFS)の受講者）を対象に、いつ、どのような辞書を、どのように使用しているのかについて、アンケート調査（117名）およびインタビュー調査（8名）を行い、その辞書使用についての実態を明らかにした。日本語学習者の文章産出時の「辞書」使用に関しては、そのスキルを養成すること、および辞書には良質かつ十分な例文を掲載することの2点が必要であるという結論を得た。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to investigate dictionary use by foreign students through the analysis of results of a survey and interview of JLPTUFS (Japanese Language Program, Tokyo University of Foreign Studies) foreign students. 117 responses from speakers of various Japanese levels as well as native speakers were collected for the survey. The interviews were conducted with 8 foreign students. Analysis of results led to the conclusion that two points in particular are important regarding dictionary use by Japanese language learners. First, we must consider training learners in the skills they need to use dictionaries effectively. Second, we must improve the quality of dictionaries for Japanese language learners by providing a large number of example sentences that the learners can use in order to distinguish the intended usage of the targeted word in context.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	0	500,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	180,000	1,280,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、日本語教育

キーワード：教育工学・教材・教育メディア、学習者辞書

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語辞書のあり方

日本語学の分野では、国広哲弥『理想の国

語辞典』（1997年）なども刊行され、日本語学習者も視野に入れた日本語辞書の充実が指摘されるようになって久しい。『日本語学』

16 卷 12 号 (1997 年) や、『月刊言語』24 卷 6 号 (1995 年) などでも、辞書についての特集が生まれ、外国人を対象とした日本語辞書のあり方などについても論考が掲載されてきた。日本語教育の分野においても、『日本語表現活用辞典』(姫野昌子監修) (2004 年) など、日本語学習者向けにコロケーション(連語) 情報を豊富に載せた、特色ある辞書も刊行されるようになっており、本研究もこの辞書の分担執筆者の一人である。

(2) 日本語プログラムと作文コーパス

本研究は、2004 年 4 月より東京外国語大学「全学日本語プログラム」(東京外大における非正規の留学生を対象とした全学的な日本語プログラム。初級から超級までの 8 段階のレベルがあり、1 週間の延べ開講コマ数は約 90。受講者総数(履修登録者数) は每学期約 160 名~200 名。学習者の出身国・地域は、アジア、中東、北米、中南米、欧州、太平洋、アフリカと世界各国・地域にわたる) にて日本語教育を担当している。

また、「学習者の産出する日本語」のアーカイブ構築とも言うべき構想の一環として、2008 年~2010 年にかけて、上記日本語プログラムの受講者を対象に「JLPTUFS 作文コーパス」(広く日本語教育研究に資することを目的とし、上記「全学日本語プログラム」(JLPTUFS) で書かれた学習者の作文(期間: 2009 年~2010 年) のうち、執筆者によるデータ提供の同意の得られた作文を、基本的な作文執筆情報とともに電子データ化したもの。国籍・母語背景および日本語レベル等、多様な学習者の作文データが計約 1,500 件収められている) の構築にも取り組んできた。

また、学習者の作文に見られる語彙・意味的な誤用の分析も継続的に行ってきた。

しかしながら、上記「JLPTUFS 作文コーパス」に収録された学習者の作文データを実際に見てみると、学習者には、文章を産出する際、辞書を使用してもなお「言いたい表現」が的確に探し出せない場合があるという現状があることがうかがわれる。辞書はもちろん万能のツールではないが、少なくともより良い学習リソースとして、辞書にできることには何があるのだろうか。学習者辞書の改善すべき点を再検討することが必要ではないかと考えられる。

(3) 学習リソースとしての辞書

上記「全学日本語プログラム」の受講者による授業評価アンケートでも、2009 年度、回答者の 75% (春学期) および 79% (秋学期) という多くの者が、学習リソースとして「辞書をよく使う」と答えている(「全学日本語プログラム学生アンケート」集計結果(2009 年度春学期・秋学期))。「辞書」は、学習者

にとって身近な学習リソースとなっていることがわかる。また、授業中の課題や宿題として作文の執筆が課される際、その実施条件として、時間制限や字数指定の他に「辞書使用可」という項目が設定されることも多い。

しかし、ここで学習者が使用する「辞書」とは、一体どのようなものなのだろうか。そして、学習者はそれを文章表現を行う際に、あるいは日本語を使ってその他の活動を行う際も含め、どのように使っているのだろうか。日本語学習者の辞書使用の実態については、まとまった調査はなされていない。

2. 研究の目的

本研究では、世界各国・地域より日本の大学に留学し、日本語を学習している学習者を対象に、その「辞書使用」についての実態調査を行い、「留学生は、言いたい日本語をどう見つけるのか」を実証的に探ることを目的とする。具体的には、東京外国語大学留学生日本語教育センターにおける「全学日本語プログラム」(東京外国語大学における非正規生を対象とした日本語プログラム) の受講者を対象に、留学生がいつ、どのような辞書を、どのように使用しているのかについて、アンケート調査およびインタビュー調査を行い、その辞書使用の実態を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 2010 (平成 22) 年度

パイロット調査を経てアンケート調査用紙を完成し、「全学日本語プログラム」受講生を対象にアンケートの本調査を行う。調査概要および研究の成果について学会等で中間報告を行う。

①春学期: アンケート内容を検討し、アンケート調査用紙を作成する(日本語・英語並記)。パイロット調査を実施。

②秋学期: アンケート改良版を作成し、本調査を実施。

(2) 2011 (平成 23) 年度

アンケート調査の結果を集計・分析し、さらにインタビュー調査を行い、辞書使用の実態を詳しく調査する。調査および考察結果について研究発表・論文報告を行う。研究の継続的發展を考え、アンケート調査のその他外国語版を作成する。研究結果全体について報告書をまとめる。

①春学期: アンケート結果の集計と分析を行う。インタビュー調査を実施。

②秋学期: インタビュー調査結果のまとめを行う。アンケート調査の翻訳版を作成。研究成果報告書をまとめる。

4. 研究成果

(1) アンケート調査の概要

- ①調査時期：2011年1月～2月（調査期間：約3週間）
- ②調査方法：アンケート調査用紙を配布し、回答後に回収
- ③調査対象：「全学日本語プログラム」履修対象者
- ④調査内容：
 - a. ふだん使っている辞書について
 - ・日本語を読んだり書いたりする際に、どのような辞書を使っているか。
 - ・日本語を使ってどんな活動をする際に、辞書を使っているか。
 - ・日本語で文章を書く時、どのタイプの辞書をどのぐらいよく使うか。
 - b. 辞書に載っている例文の評価
 - c. 使用している辞書の詳細（説明言語、アプリケーション名など）
 - d. 辞書を使用する際に不便だと感じることや、辞書を使用する際に気をつけていることや工夫していること
 - e. 基本情報（日本語レベル・国籍・母語・専門・来日回数・日本語の勉強の目的等）
 - f. インタビュー調査への協力の可否
- ⑤調査言語：日本語・英語を併記
- ⑥有効回答数：117部

(2) インタビュー調査の概要

- ①調査時期：2011年7月～8月
- ②調査対象：アンケート回答時に、インタビュー調査への協力を可とした回答者の中から、日本語レベル、母語、辞書の使い方の工夫についての自由記述欄などを考慮し、8名の学習者に依頼。
- ③調査方法：1人約1時間、ふだんどのような辞書をどのように使用しているか、半構造化インタビュー形式にて実際に辞書を使いながら書いた作文などにに基づき、確認。

(3) アンケート調査の結果

a. 回答者の日本語レベル

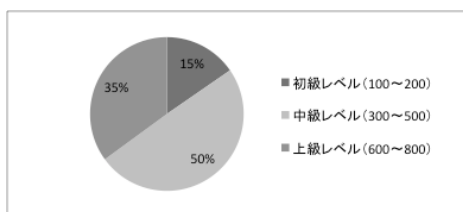


図1 回答者の日本語レベル

117名のうち初級18名、中級58名、上級41名となり、中上級レベルの回答者が約85%を占めた。回答者の国籍は計42の国・地域にわたる（アジア地域50名、欧州49名、北米7名、中南米3名、中東5名、アフリカ2名、大洋州1名）。

b. ふだん使用する辞書

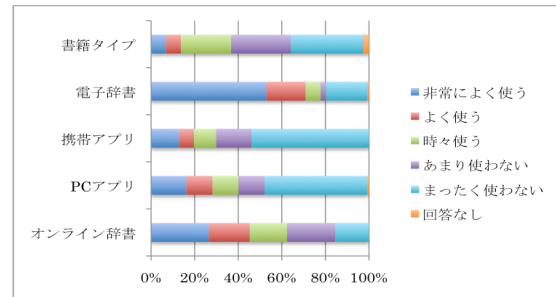


図2 ふだん使用する辞書について

電子辞書については、「非常によく使う」と回答している者が約半数を占める。書籍タイプの辞書はほとんど使われないのではないかという予測に反し、「時々使う」という回答が他のどのタイプの辞書よりも多い。

携帯電話およびパーソナルコンピュータのアプリケーションは、「非常によく使う」と「よく使う」を合わせると2～3割の回答者はよく使うとする一方、「まったく使わない」者もそれぞれ半数近くを占め、使用傾向は分かれている。

オンライン辞書をまったく使わないという回答は、電子辞書をまったく使わないとする回答数よりも少ない。「非常によく使う」から「時々使う」までを合わせると、全体の約6割はオンライン辞書を何らかの形で使用しており、オンライン辞書の使用は、学習者に広く行き渡りつつある辞書使用の形態として、注目すべき1つの傾向を示している。

c. 辞書を使用する活動

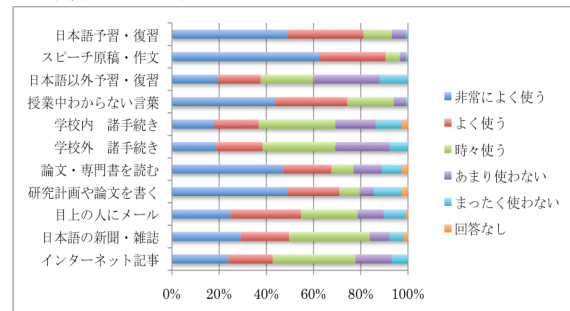


図3 辞書を使用する活動

ほぼ予測通りの結果となった。半数以上が「非常によく使う」あるいは「よく使う」と答えているのは、スピーチの原稿や作文を書く時（91%）、日本語のクラスの予習・復習・宿題をする時（81%）、授業中分からない言葉を調べる時（74%）、研究計画や論文を書く時（71%）、論文や専門書を読む時（68%）、指導教員など目上の人にメールを書く時（55%）である。

d. 日本語で文章を書く際に使用する辞書

英語あるいはそれ以外の母語から日本語を調べるタイプの辞書がよく使用されている。国語辞典をよく使うとする回答者の9割は中級レベル以上である。類語辞典など特殊な辞書を使っている者は少ない。その他、日本語の例文が豊富に掲載されているため「和英辞典」を見るという回答が複数名からあったことは、特筆すべき点である。

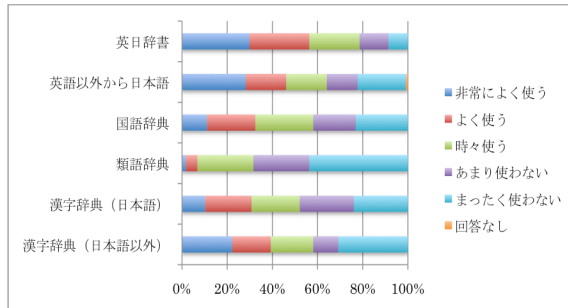


図4 日本語で文章を書く際に使用する辞書

e. 辞書に載っている例文の評価

辞書の例文についての評価は、自由記述欄からその問題点が読み取れる。「例文が未習の文型から成り立っており、文構造がしばしば複雑だ」(初級(100))、「母語(ロシア語)から日本語を調べる辞書に例文がないため、和英辞典を併用している」(中級2(400))、「パーソナルコンピュータのアプリケーションとオンライン辞書をよく使うが、収録語彙が十分ではなく、必ずしも日本語の意味が母語の対訳語と一致するわけではない」(中級2(400))、「その語を実際にどのように使うのかを知るためには例文が足りない」(超級(800))、「使用される適切な文脈については日本語母語話者に確認しなければわからない場合が多い」(中上級(500))などの指摘がなされている。

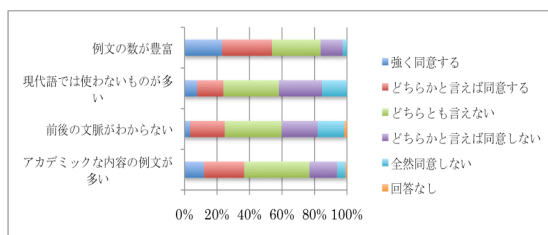


図5 辞書に載っている例文の評価

f. 電子辞書の種類

電子辞書を使うとする回答者に使用機種をたずねた。

表1 使っている電子辞書

	CASIO	CANON	その他	回答なし	計
人数(人)	65	10	15	2	92

「その他」の内訳は、「SHARP」8、「NintendoDS漢字索引辞典」3、「iPod touch」2、「Zaurus」

1、「Besta」1である。

g. 辞書アプリケーションの種類

使用する回答者にアプリケーション名をたずねた。回答者の日本語レベルは初級から超級にわたる。

ウェブ上からダウンロードするなどし、パーソナルコンピュータにインストールして使用するタイプの辞書アプリケーションについて、3名以上から名前が挙がったのは、「wakan(和漢)」9、「Rikaichan」4、「YARXI」4、「Babylon」3の4種である。ウェブ上に公開されているオンライン辞書(インターネットに接続しアクセスするタイプ)について、3名以上から名前が挙がったのは、「Denshi Jisho-Online Japanese dictionary」23、「google tranlate」16、「Yahoo!辞書」5、「和独辞典」5、「Jim Breen's WWWJDIC」3の5種である。

h. 自由記述欄①: 辞書を使う時、気をつけていることや工夫していること

「ある」と答えた回答者は117名中22名で、その全員が具体的な回答を記している。「使い方を知りたいので必ず例文を見る」など、例文の重要性が指摘されていること、「良い例を多く探すため複数の辞書を併用する」など、その方策について述べられていることが特徴的である。例文を重視するコメントからは、学習者が辞書を見る際、言葉の意味だけではなく「実際の使い方」を知りたいという必要性が強くあることがうかがわれる。

i. 自由記述欄②: 辞書を使う時、不便だと感じる

辞書を使う時不便だと感じるものが「ある」と答えた回答者は117名中34名で、その全員が具体的な回答を記している。「例文が少ない・足りない」という指摘が多い。電子辞書に搭載されている辞書が日本語を勉強する外国人のための辞書でないことも指摘されている。また複数の回答者が、漢字の読み方がわからない時、その漢字を辞書で探し出すことが難しいという点を挙げている。

(4) インタビュー調査の結果

表2 インタビュー調査対象者

実施年月	インタビュー対象者			
	日本語レベル	国籍	母語	性別
2010年7月	上級	ポーランド	ポーランド語	女
2011年7月	上級	ベトナム	ベトナム語	女
2011年7月	上級	ベトナム	ベトナム語	女

2011年 7月	上級	チェコ	チェコ語	男
2011年 8月	上級	ポーランド	ポーランド語	女
2011年 8月	中級	中国	中国語	女
2011年 8月	超級	インド	ヒンディー語	女
2011年 8月	上級	ルーマニア	ルーマニア語	男

インタビューを通じて学習者が行っている辞書使用の様々な工夫を知り、そこから見てきた点をまとめると以下の6点となる。

①辞書を使うことの意義

自律的な学習姿勢を持つ学習者にとって、辞書を使うことは単に学習を補助する手段ではなく、日本語の学習活動そのものであると言える。辞書を使用する活動には、ノートをとったり、調べた結果に基づき自分で対訳形式の語彙帳を作るなど、記憶を強化するのに役立つさらなる学習活動を伴うことも多い。学習者によっては、自分で作成した学習ノートをウェブ上で公開したり、日本語学習に役立つツールのリンク集を掲載するなど、学習リソースを上手に使っていきこうとする自覚的・自律的な学習態度が見られる。

②書く活動の基盤

「書く」ことは「読む」と切り離して行われるものではない。何かを書くためには、インプットとなる素材・資料をよく読むことから活動は始まる。語・表現の意味やその使い方を調べたり、必要になると思われる表現をノートにとっておくなどの読解中の活動が、その後のアウトプットの活動につながる。「読む」活動を通じて、書く時に必要となる語や表現は、既に準備されつつあると言える。

③文法・語彙の基礎的知識

文法・語彙の基礎的知識は辞書を応用する際に必要である。基本的な文法が身に付いていれば、辞書の例文を見て必要に応じて語を入れ替えたり、構造を変えて文法的に的確な文を作るなど、それを応用することができる。しかし、基礎的な日本語力の習得途上にある段階で、文章表現の際に無理に辞書を使用すると、学習者の母語あるいは第二言語からの直訳の発想に基づき、辞書に掲載されている対訳表現を適当でない文脈にそのままあてはめて使ってしまうなど、結果的に不自然な日本語表現を誘発する恐れがある。初級段階および初級を終了したばかりの段階では、十分な応用力が発揮できないことが考えられるため、文章を書く際に辞書を使用することについては、自覚と注意が必要である。

④漢字の知識

漢字の知識は、言いたい表現を探し出すために有益である。特に、漢字を、漢語を構成する要素（字音形態素）として認識することの重要性が指摘される。漢字の意味・読み方（漢語を形成するという観点からは、特にその音読み）のみならず、その漢字を構成要素として含む「漢語」の知識を幅広く身に付けていくことは、その知識を応用し、表現したい意味を表す的確な漢語表現を辞書から探し出す際に役立つだけでなく、より豊富な語彙力を身に付けていくための方策となる。

⑤既習の語彙知識

関連語に関わる知識も言いたい表現を探し出すのに有用である。関連する概念を思い浮かべ、その語を辞書で引くことで目指す語を探し当てるという方策をとることができる。ここで言う「関連」とは、狭い意味での類義語や反義語など、同一の意味分野に属する語どうしの意味的な関連性のことだけではなく、同一の場面やトピックにおいて用いられるなど、より広い意味での関連性を含めたものである。

⑥良質な例文

辞書には、良い例文が豊富にあることが必要である。学習者は対象となる言葉の「実際の使い方」を知るために辞書の例文を見る。しかし、辞書には例文が十分ではないことが複数の回答者によって指摘されている。

日本語学習者を対象とした辞書には、言葉の意味や使い方を言葉によって説明するだけでなく、意味・用法が的確に示せるような良質な例文を豊富に提示する工夫がより求められる。基本的な語彙を用いた、文法構造の明確な例文、かつ学習者が必要とする文脈で使用可能かどうかの判断に役立ち、適切にその語が使用できるよう、典型的な連語（コロケーション）の情報を踏まえた上で、統語的・意味的な文脈の多様性をおさえた例文が必要である。

また、例えば大学レベルで学ぶ日本語学習者を対象と考えるならば、必要となるトピックに合致したアカデミックな語彙を使用した例文も必要であり、対象となる学習者の日本語学習の目的により、基本語彙の中からのような語を例文に盛り込むかについて工夫が必要となる。

(3)今後の展望

本研究における調査結果をふまえ、今後日本語学習者の「辞書」使用に関しては、教育の実践面、およびリソース作成面の2つの側面から、以下の2点を考えることが必要であると考える。

①教育の実践面：学習者の辞書使用のスキル養成：

辞書の使用者である日本語学習者には、特に中級の入口の段階から上級にかけて、辞書の効果的な使い方を学習ストラテジーの1つとして自覚的にとらえ、自律的学習の確立に役立てていくことが必要である。学習者自身が辞書の使用をめぐって自ら工夫を行っている様々な点は、他の学習者にとっても参考になる点が多い。そのようなリソースの利用法について、学習者同士で情報を共有することも有益である。

例えば日本語のコースにおいては、文章表現のカリキュラムの中に辞書の使い方について扱う時間を組み入れるなど、具体的な改善を行うことが可能である。実際に文章表現の課題を行いながら、「こんな時にどう辞書を利用するか」「こんな辞書はどんな使い方ができるか」と確認・議論を行い、学習者自身が日頃行っている使い方の工夫を紹介するなど、学習者同士で互いの情報をシェアし、相互に学び合う形を組み入れていく形をとることが考えられる。学習者の日本語レベルに合わせて、辞書使用の工夫すべきポイントを絞って提示していくことが効果的ではないだろうか。

また、学習者が日本語を使って何ができるのかを示す「Can-do statements」の観点からは、学習者の書く活動に関わる方略として、中級レベル以上を目安に「辞書を使用し、的確な表現を探し出すことができる」等の記述を加えることも検討に値する点ではないかと考える。

②リソース作成面：学習リソースである辞書の例文の工夫

日本語学習者を対象に考えた場合には、辞書には特に良質な例文を多く提示する工夫がより求められる。

上記インタビュー結果についても記したように、基本的な語彙を用いた、文法構造の明確な例文、かつ学習者が必要とする文脈で使用可能かどうかの判断に役立ち、適切にその語が使用できるよう、典型的な連語（コロケーション）の情報を踏まえた上で、統語的・意味的な文脈の多様性をおさえた例文が多く必要であると思われる。

また、本研究の新たな発展・継続の方向性としては、さらに学習環境の違いを視野に入れて、日本語学習者の学習リソースの利用の実態について、調査を行うことが挙げられる。

例えば、東京外国語大学は2011年2月現在、世界33か国・1地域にわたる67大学と大学間交流協定を結んでいる (<http://www.tufs.ac.jp/intlaffairs/schools/>)。このようなネットワークを活用することにより、今

後、日本国外においても同様に日本語学習者の学習リソースの利用の実態について、調査を実施することも可能となる。その第一歩として、本研究ではアンケート調査を日本語・英語版だけでなく、アラビア語版、タイ語版においても作成した。

日本国内との比較を行うことを通じて、今後、学習環境の違いを視野に入れた、求められる学習者辞書のあり方を提示していくことが次の研究課題となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 鈴木智美、留学生の辞書使用についての実態調査-東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析-、東京外国語大学留学生日本語教育センター論集、査読無、第38号、2012、pp. 1-16
- ② 鈴木智美、辞書の使用が引き起こす学習者の不自然な表現-「JLPTUFS 作文コース」の作文から見えてくること-、2010世界日本語教育大会論文集、査読あり、2010、1436-0-1436-9 (DVD版)

〔学会発表〕(計5件)

- ① 鈴木智美、留学生の辞書使用についての実態調査-東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケートおよびインタビュー調査の結果と分析-、鹿児島日本語教育研究会平成23年度第2回例会、於鹿児島大学、2012・2・17
- ② 鈴木智美、留学生の辞書使用についての実態調査-東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析-、ICJLE2011 世界日本語教育研究大会、於天津外国語大学、2011・8・21
- ③ 鈴木智美、留学生の辞書使用についての実態調査-東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査結果-、第9回日本語教育研究集会、於名古屋大学国際言語文化研究科、2011・8・8
- ④ 鈴木智美、留学生の文章産出時における辞書使用-その実態調査の実施に向けて-、第8回日本語教育研究集会、於名古屋大学国際言語文化研究科、2010・8・9
- ⑤ 鈴木智美、辞書の使用が引き起こす学習者の不自然な表現-「JLPTUFS 作文コース」の作文から見えてくること-、ICJLE2010 世界日本語教育大会、於台湾国立政治大学、2010・7・31

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 智美 (SUZUKI TOMOMI)

東京外国語大学・

留学生日本語教育センター・准教授

研究者番号：70332632